



ピッポ新聞

2004

1

No.183

子どもの本専門店

年間購読料(送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

山登りはやめられない

ここ十数年、新年を山で迎えることが多くの慣例になっていました。その山行の様子をピッポ新聞に書くことも多かったのですが、これを読んでもくれる方の何人かから「最近では頂上まで行かずに、途中で引き返す事が多いですね」などと言われてしまった。

全くその通りで、体力が持たずに途中で日和つてしまっていたのです。そこで、今年こそはと密かに期するものがあり、事前にいくつかの対策を考えました。

それと、近頃東京あたりでは高層ビルから初日の出を迎えるのが流行とか。どうせならもつと高い山のでっぺんから初日の出を見て、都会の高層ビル派を見下してやれ!とも考えたのです。(考えることが子どもっぽいですね)

体力不足をカバーするにはどうしたらよいか

対策その一。当たり前のことですが、体力アップを図る。だが、しかし、既に十二月、いままら走ったとて、いかほどの体力がつくというのでしょうか。そこで窮余の一策、事前に心臓に負荷をかけておけばいくらか足しになるのではないかと考えたのです。(心臓専門医のT先生いかななものでしょうか?) それには山に登るのが一番です。

ここでも、だがしかし、なのです。これでも一応子どもの本屋ですから、十二月は何かと忙

しくて時間がとれそうもありません。だが、ここで諦めたら去年と同じです。高層ビル派を見下すこともできません。そうだ! 店を開店する前に山に登って戻ってくればよいのです。

十二月の最初の日曜日朝4時過ぎに家を出て、竜爪山の登山口へ。旧登山口から登山開始、勿論まだ暗闇の中です。さすがに、この時期のこの時間に山登りをする酔狂な人はほくしかいませんでした。ヘッドランプの明かりを頼りにゆっくり登りました。

50分ほどで穂積神社へ到着、一休みして、さて出発と思ったのですが、人っ子ひとりいない暗い神社です。何だか急に心細くなったので、日頃神仏に手などあわせることがないのですが、おもわず社殿に手を合わせ無事を祈ってしまいました。

頂上の文殊岳(1050メートル)まで下から1時間50分かかりました。帰りは50分ほどで、

8時少し前には家にもどることができました。

しかし、ただ1回だけでは効果など期待できません。その証拠には表面的には足に筋肉痛が出ただけでした。

翌週の土曜日、今度は昼食後出

赤岳を目の前に行者小屋近くで (30日)



赤岳頂上で初日の出を待つ 1月1日



次なる対策は、時間にゆとりを持った計画を立てることです。考えてみれば、こんな事は山行計画では当然のことなのでしようが、これまででは夜行で出かけ、朝一番から可能な限り頂上に近づこうという計画を立ててこれを実行してきました。体力に自信があったこ

かけるにあたって、ぼくの前にカミさんという大難関が立ちわだかつたのですが、何とかこれをクリアーしての出発でした。2回目は足を慣らすため、雪山用の登山靴を履いて登りました。頂上まで、1時間40分でした。3回目は26日に登ったのですが、今度はカミさんも諦めたのか、それともクリスマスが過ぎてヒマになったためか、あつさり許可をくれました。3回目は少し負荷をかけるため無理をして登った、1時間15分ほどで登れました。思ったとおり、効果がでてきたようです。しかし、体力不足がまだ気にならなかったころは、ここを1時間強で登っていたことを考えればまだまだですけれどね。

行動計画にゆとりを取り入れてみる

ろは、これで何ら問題は生じませんでした。だが、この数年は予定していた時間に予定した場所に到着できないことが多くて、それで気持ちに焦りを生じ自分のペースを乱してしまつて、結果的に失敗することが多かったのです。

今回は夜行をやめ、新宿に前泊して、朝7時半の「あずさ」に乗ることにしたのです。これですと、前日ゆつくり眠れますから、気分的にもゆとりを持つことができました。それに、いきなり稜線にある山小屋を目指すのではなく、下の小屋までいけばよいのですから、のんびり構えることができ

スケジュールを逆さに見てみたら

今回はスケジュールを逆にしたことにしてみました。どういうことかというところ、ぼくは年末登山はここ何年かは、八ヶ岳を目指しました。その最後の到達点は主峰の赤岳と決めていたのです。ところが、どうしても赤岳に行き着く前に問題が起これ目の果たせなかつたのです。それで満足感を得ることができずにいました。だったら、先ず赤岳に登ってそれから他へ縦走すればよいのだと考えたのです。

立てた3つの対策は成功したか？

出発点の美濃戸口へバスで着いたのが30日の午前11時10分頃。支度を整えて出発したのが11時半、風も無く天気がとても良い

ので、上はTシャツに山シャツ、下は山ズボンにスパッツを付けるだけの薄着で行動することにしました。途中の林道は雪もなく12時20分に美濃戸に到着。ここで800円のカレーライスで昼食、周りを見回すと結構登山客が多いようです。

この分だと赤岳鉱泉は混む事が予想されるので、予定では今日は赤岳鉱泉へ泊まるつもりでしたが、これを変更して南沢のコースから行者小屋へ向かうことにしました。

南沢の登山コースへ入ると、そこからは雪道でした。歩き出してすぐに女性の登山者が追いついてきたので、道を譲って先に行って貰いました。彼女は瞬く間に、ぼくの視界から消えていきました。さらに、ぼくより年かきの2人組の男性にも道を譲りました。

今日は行者小屋まで行けばよいのですから、まだ時間はたっぷり気持ちもユツタリです。ぼくは意識的に速度をゆるめて、雪上歩行を楽しみながら登って行きました。どうやら3回の竜爪登山の効果はあつたよう、体調もとても良いようで、1時間ほど歩いたのですがここまで息を整えるために2〜3分立ち止まつただけです。

そうこうするうちに、先程の女性が休んでいるのを追い越して、さらに男性二人にも追いつきました。2人とは言葉を交わし、小休止。先に出発した2人に、今度は登りの途中で道を譲って貰い、さらに幾組かのパーティーを追い越しました。決して先を急いだわけではなく、調子が出てきて足が前へまえへと出てしまったのと、息が上が

らなかったの、ほとんど休む必要がなかった結果です。行者小屋まで3時間ほどと見込んでいたのですが、2時間で到着しました。まずは作戦成功です。

赤岳へ

見込み通りに、その夜の行者小屋は混むこともなく、ユツタリ寝ることができました。翌朝(31日)7時に小屋を出発です。ここから赤岳頂上へは地藏尾根のルートと文三郎道の二つのルートがありますが、ぼくは地藏尾根はすでに登っているの、これまでは下山ルートにしか使ったことが無かった文三郎道に行くことにしました。

小屋を出るときには既にチラホラと雪が舞っていました、今日の天気予報は前半が悪く後半は回復といものでした。

今日はさすがにオーバーブズボンをはき、上はゴアテックスの雨具を着、帽子をかぶり、首には風よけを巻きました。これでもいつもの年より軽装です。

この道はいきなり急な登りから始まるので体が慣れるまで結構きつい。昨日と同じで、追いついてきた人にはどんどん先に行つて貰いました。

鉄の階段に差し掛かるころから、風が強くなってきました。ここらあたりは雪のない季節はハイマツ帯だ。見通しが良い分、風が直接体に吹きつけてきます。

階段は綱目になっていて、雪が積もっていれば問題ないのですが、所々雪が吹き飛んでいて綱目が露出していますから、アイ

ゼンを引っかけないよに神経を使います。中山の稜線へ出るとうそこは森林限界をこえていますから、風と雪がますます強く吹きつけていました。

数珠つなぎのような状態で、岩場を人の後に付いて登っていたら、何時のまにか頂上でした。強風の中で証拠写真を一枚撮ったのですが、後で見たら写っていませんでした。頂上小屋には9時15分頃到着しました。

2004年1月1日赤岳頂上からの初日の出



ぼくはこの先へすすむつもりで、アイゼンも外さずに小屋の土間に座つて、雪と風が弱くなるのを待つことにしました。外へ出て携帯電話でカミさんへ、無事頂上へ着いたことを知らせました。風と雪は一向におさまりません。昨夜行者小屋でいっしょだった人もここで停滞するか、先へ進むか迷っています。

こんな状態で、1時間半が経ちました。この間余り長く座り込んでいるのも悪いのでコーヒーを注文して飲んだりし、天気の良い回復を待っている人たちと話をしながら待ちました。吹雪はさらに強くなったようで、雪まみれの人たちが後から到着します。

2時間が過ぎたところで、ぼくは頂上小屋に停滞することを決断しました。アイゼンを外し宿泊を申し込みました。他の人も泊まることにしたようです。

再会!

この夜は大晦日、ここ八ヶ岳の各山小屋ではこの日に忘年会というのをやるのです。赤岳頂上小屋でも建て替え十周年記念ということで、毎年忘年会は会費500円取るが、この夜は無料ということで、夕食後始まりました。小屋番の挨拶から始まり、順番に自己紹介をすることになったのです。誰かが、この夜の宿泊者は48名と言っていました。

この自己紹介で、ぼくは思いがけない再会をしたのです。

じぶんの自己紹介の時、「これまで3回稜線上の小屋に泊まったことがあるのですが、その3回とも吹雪でした。1回はこの頂上小屋が建て替えられる前の古い小屋で、あと1回は7、8年前硫黄岳小屋でした。そのときは猛吹雪で・・・」などとしやべったのです。

ぼくの7、8人後に立った人が、「先程の伊藤さんと硫黄岳山荘でいっしょだった上田と言います。伊藤さん貴方本屋さんでしたよね・・・」と言いだしたのです。

そうだ!上田さんだ!

先程からぼくも彼をどこかで会ったことのある人だなと見ていたのですが、はつきりと思い出せなかったのです。上田さんと

いう名前や顔は忘れても、あのときの体験は忘ることができません。

8年前のやはり大晦日、ぼくは黒百合ヒュッテから赤岳を目指したのですが、天狗岳の頂上へ着いた頃から雪と風が強くなり、根石岳を通過するころには猛烈な風が吹き付けていたのです。

このときには前後で行動している人は、ぼくを入れて4人だけでした。いつしかお互いに無事を確認し合いながら行動するようになっていました。風と雪はますます強まってきました。ぼくらはお互い暗黙のうちに4人で行動するようになっていました。耐風姿勢で風に耐え、風と風の間を僅か



(もうすぐ樹林帯、慎重に下山)

のように舞ったわけではなく、「ひつpegされた」という感じでした。巾の広い稜線だったので事なきを得たのですが、これが狭い稜線だったなら一巻の終わりだったことでしょう。

今回、ぼくは上田さんにこの時のことを

聞いてみたら、はつきりと覚えていました。あのとき、もしぼく1人だったと思うと3人にはおおいに感謝です。

あれいらの再会です。きょうもし先へ進んでいた上田さんにはお会いできなかったのですから、きょうの吹雪にちよつとだけ感謝です。

素晴らしい初日の出

明けて2004年1月1日、だれかが「今日は天気がいいぞー」と言う声で起き出した。朝食後、出発の支度をして小屋の外へ出ると、目の前に素晴らしい雲海が広がっていました。さっそくカメラでこれを撮り、ザックを置いて頂上へ。

まだ日の出前だが、富士山もくつきりと姿を現しています。富士山を入れた自分の写真を撮って貰ったり、撮ってあげたりしていたら、水平線上が茜色に染まってきました。

初日の出です。5分ぐらいの間に7枚ほどこれも撮りました。反対の北アルプス方向を眺めると、槍や穂高連峰もきれいに見えます。

小屋に戻ると、昨日仲間と別行動でここまで登ってきて、吹雪のため下山できなくなつて小屋に泊まった広島的女性(自己紹介の時話していた)が、だれか「地蔵尾根を降りませんか」と、いつしに下山してく

れる人を探していたので、「ぼくが一緒におりましょう」と申し出て、彼女と行者小屋まで同行することにしました。

赤岳展望荘まで下ってきたら、そこで何とブロッケン現象が現れました。目の前の雲(ガス)にまん丸の虹が現れ、その中心に自分の影が大きく投影されるのです。両手を広げて動かすと、巨人の影のようにその影も動きます(当たり前です、でも昔の人はとくに、ドイツのブロッケン山でこりやすかつたのでしょうか、これをブロッケンの妖怪と呼んだのだそうです)。

この現象はある気象条件が揃わないと起こりませんから、ぼくもこんなにはつきりしたのを体験したのは初めてです。写真を撮つたのですが、うつすらと虹が写っているだけでした。この後鎖場も難なく通過して、行者小屋へ無事下山しました。

今回も縦走できませんでしたが、ぼくは今回はとても充足した山行だったと思っています。上田さんに再会できましたし、赤岳の山頂で初日の出も見ることができました。その上、ブロッケン現象も体験できました。今年はきつと良いことが有るように思えてきました。あーきてよかった！

編集後記

「子どもの本屋なのに本のこが載ってない」とお叱りを受けそうな今号ですが、すみませー来月は正常(?)号だぞ！今月の「ばあやのお話」は休みます。